

# 清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第32号

2017年6月17日

## マタイ受難曲 各論-4 (第4, 5, 6, 7, 8, 9曲)

### 第4曲 レチタティーヴォと合唱 : 祭司長・長老らの謀議(エヴァンゲリスト、祭司長・長老ら)、ベタニアの塗油(エヴァンゲリスト・イエス・弟子たち)

大祭司カイアファの屋敷に集まった祭司長や長老達は、イエスを捉え、殺すためのはかりごとを相談します。彼らの言葉「祭りの間はやめよう、民衆の間に騒ぎが起こるといけないから」が2群の合唱による8声で歌われ(4b)、第I合唱(祭司長達?)から2拍遅れて第II合唱(長老達?)が歌い出しますが、13小節の3拍目からは両群が揃って「群衆の間に騒ぎが起こる」と言い、新興勢力としてのイエスを慕う民衆の反乱を怖れている様子が窺えます。第2部に入るとこのような「群衆合唱」が数多く登場しますが、大半は8声の二重合唱で各パートがバラバラに歌い出し、やがてホモフォニーで声をそろえて叫ぶようになります。その極端な例が第58曲 d で、8声で始まった合唱はすぐにI, II合同の4声合唱となり、最後はユニゾンで「Ich bin Gottes Sohn 私は神の子である(というのなら)」と嘲弄し、ぞっとするような効果を上げています。

一方、イエスの一行がベタニアに住むハンセン病患者シモンの家に行ったとき、一人の女性(マグダラのマリアとも言われる)がイエスの頭に高価な香油を注ぎかけます。この香油はナルドといい、オミナエシ科甘松 *Nardostachys jatamansa* の根茎から水蒸気蒸留で得た精油で、現在は香料市場に流通せず、長年精油を扱ってきた筆者もその匂いを嗅いだことがありませんが、リストされた香気成分からウッディー・アーシー系の匂いと想像されます。高価な精油で、イエスに注がれた量(1リトラ)だけで労働者一人の300日分の賃金に相当したそうです。それを見た弟子たちは憤慨して「なぜこのような無駄をするのか、この香油は高く売って(その金で)貧しい人に施すことができたのに」(4d)と言い募るのですが、イエスは「なぜこの人を困らせるのか、(中略)この人は私の身体に香油を注ぎ、私を葬る準備をしてくれたのだ」と弟子をいさめます(4e)。

### 第5曲 レチタティーヴォ・アコンパニヤート「愛しい主よ！」(アルト、フルート1, 2、通奏低音)ロ短調-嬰へ短調

フルート2本が平行音程で奏でる柔らかな16分音符に乗って、アルトが香油を注いだ女性を讃え、自分も涙の一滴をイエスの頭に注ぎたいと歌う、自由詩によるアリオーソ的なレチタティーヴォです。

### 第6曲 アリア「懺悔と後悔の思いが」(アルト、フルート1, 2、通奏低音)3/8拍子 嬰へ短調

第5曲と同じ編成によるダ・カーポアリア。フルートの音型も第5曲から引用しています。この音型を「涙の滴り」とみることも可能です。「Buss und Reu 懺悔と後悔」の「後悔」に当たる Reu には不安定で不協和な音程が与えられ、テキストの印象を強めています。

それにしてもバッハの宗教音楽における2本のフルートは何と素晴らしいことでしょう。今思いつくだけでも「ロ短調ミサ曲」の”Qui tollis peccata mundi”や「マニフィカート」の”Et misericordia”など情感を込めた短調の楽曲中で、フラウト・トラヴェルソ(横型フルート)の二重奏は実に効果的に聴く者の心を揺さぶります。

ダ(から)・カーポ(頭)アリアとは主部と中間部を歌ったあと、もう一度前奏から主部を繰り返して、中間部に入る直前の後奏で曲を締めくくるスタイルです。これはバロックオペラの定型であり、「マタイ」のアリアもこのスタイルを取り入れました。ダ・カーポアリアはこの時代のABAという対称性への好みや、再現される主

部での即興演奏の可能性を反映したものとされています。しかし現代において指示通りに歌われるダ・カーポアリアを一曲聴き通すには、かなりの忍耐力が必要なことは皆様もお感じになっておられるでしょう。筆者も、ソリストがよほど即興的な歌唱を聴かせてくれるのでなければ、再現部をまるごと聴き通すのは正直苦痛です。もしも許されるならダ・カーポした後、前奏だけ弾いて終わりにしてくれたら、と思いますがいかがでしょうか。

### 第7曲 レチタティーヴォ:ユダの裏切り(エヴァンゲリスト・ユダ)

ユダはキリストを売るために祭司長達を訪ね、銀貨30枚の対価を手に入れます。第1部最初の山場です。

### 第8曲 アリア「血を流すがよい、いとしい心よ」(ソプラノ、フルート1、2、弦楽器、通奏低音) 4/4拍子、ロ短調

エヴァンゲリストがユダの裏切りを告げた直後に突然アリアの登場です。しかも導入となるレチタティーヴォを伴わずに。ユダの裏切りとその成り行きはまだすべて語られているわけではありませんが、この唐突感を磯山雅は「このアリアの切迫した性格を物語っている」と説明しています。ユダが密告の報酬を手にした瞬間、イエスの捕縛と磔刑、そして自ら死を選ばねばならなかったユダの運命は決まってしまいました。それを知った「心ある人」は「あなたの乳を吸った子が、育ての親を殺そうとする」不条理を嘆かずにいられなかったのでしょう。

5,6曲に続いてフルートの二重奏が聴かれますが、第8曲のフルートパートは初稿の自筆総譜には存在せず、1736年の上演時に加えられたものです。ここではフルート1が第一ヴァイオリン、フルート2が第二ヴァイオリンとユニゾンになり、器楽アンサンブルは厚みを増し、これまでの室内乐的な形式から協奏曲のスタイルに近くなります。前奏は主題を提示し、ソプラノの旋律もこれと同じです。フルート1がソプラノとユニゾンになり歌唱を補強します。ユダの裏切りに遭ったイエスの胸中を推し量って、ソプラノは「Blute nur, du liebes Herz 血を流すが良い、いとしい心よ」と痛切な声で歌い出します。「Blute nur, 血を流すが良い」の歌詞には「Blute」のアクセントを強調するシンコーションのリズムが与えられ、スタカートとスラーでくられた器楽のモチーフは流れる血を描写します。中間部の終わり、通奏低音に現れる音型は、歌詞に出てくる蛇の姿を模したものと言われ、曲中に多く存在する象徴と相まって切々と聴く者の胸を打つアリアです。

### 第9曲 レチタティーヴォと合唱:最後の晩餐(エヴァンゲリスト、イエス、弟子たち)

仲間の一人がイエスを裏切ったことなど知る由もない弟子たちは、呑気に「過越の食事をどこで摂りましょう」とイエスに尋ねます。合唱 I はオーボエ1、2とフルート1、2が刻む柔らかな分散和音に乗って、ゆったりとホモフォニックに歌います。第9曲は明るいト長調に始まり、9c からト長調、ニ長調、ハ長調、変ホ長調、へ短調と動きつつハ短調に落ち着きますが、27小節でイエスが「お前たちの一人が私を裏切ろうとしている」と告げた途端に祝宴の場の空気は一変、エヴァンゲリストは強い不協和音程(長2度)である変ロ短調で弟子たちのうろたえぶりを伝え(9d)、弟子たちは口々に「Herr, bin ichs? 主よ、それは私ですか?(まさか私だとおっしゃるのではないでしょうね?)」(9e)とイエスに迫ります。

「合唱の5小節中に Herr(主よ)という言葉が11回出てくるのは、12弟子の内、ユダを除く11人がその言葉を発したことを暗示する象徴的手法である」(アルフレート・ホイス)という説がありますが、これは間違いなくバッハが意図して用いた手法でしょう。バッハの象徴法は耳で聞いただけではなかなか気づくものでなく、楽譜を読み込んで始めて見つかるものです。その意味では「隠された仕掛け」といってもよいでしょう。

【後記】 これまでの各論の進み具合で本番までに完結するのか、と心配する声が聞こえましたので、少し足取りを速めてみました。スコアで全297頁の内、今回で46ページまで進みましたが、まだまだ安心できません(!?) (新井)